



NewsLetter from SPH No. 7



平成 27 年度 京都大学 SPH 卒業謝恩会 2016 年 3 月 23 日 La Cucina 古谷にて
Graduation party on Mar 23, 2016 at La Cucina Furutani

はじめに

みなさん、こんにちは。同窓会ニュースレター、第 7 号を発行です。

本年 3 月 23 日に同窓会総会を開催し、同窓会役員の選出が行われました。2014 年の同窓会総会から新体制準備委員会を設け、会員登録の充実、登録情報の更新を行っての上、新たなスタートとなりました。同窓会活動を少しずつではありますが、充実にむけて取り組んでおります。みなさまのご協力よろしくお願いいたします。

同窓会活動 Alumni Activities

2015 年度 SPH 同窓会総会を開催

2014 年 11 月 15 日の SPH 同窓会総会后、同窓会運営に関わる新体制準備委員を募集し、同窓会組織の基板となる会員登録の充実、登録情報の更新を行ってきました。

同窓会規約により、2016 年 3 月 23 日の学位授与式の日に 2015 年同窓会総会を開催し、以下の新役員が選出されました。任期は 2 年間で。

会長 原田浩二 (3 期生) (事務局長兼任)

副会長 小林大介 (11 期生)

会計 高橋由光 (6 期生)

評議委員

1 期生 山崎新

2 期生 鍵村達夫

4 期生 植谷可恵

5 期生 福田治久

6 期生 石見拓

村上玄樹

7 期生 山口喜志子

8 期生 中村英輔

9 期生 仙石多美

11 期生 市川佳世子

福岡真悟

12 期生 白鳥博之

13 期生 小川雄右

14 期生 佐藤亮

島本大也

大学院生役員 廣江貴則 (15 期生)

寺岡英美 (16 期生)

監事 菅田真子 (14 期生)

2016 年度の活動については、卒業後の連絡網・情報提供、東大や帝京大との SPH 同窓会合同サロンの開催、ニュースレターの発行、会員名簿の作成準備となっており、同窓会連絡網の仕組みづくりを進めていきます。連絡網にはこれまでのメールでの各種案内を行っ

てきておりますが、Facebook グループや同窓会ホームページも利用していきます。

Facebook グループ・同窓会ホームページのお知らせ

Facebook グループ「京大 SPH 同窓会」ができました。ぜひご参加ください。

<https://www.facebook.com/groups/1758206774401313/>

またコンテンツを準備中ですが、同窓会ホームページを開設しました。

<http://plaza.umin.ac.jp/kusph-aa/>

SPH 同窓会交流サロンを開催

昨年度も他大学 SPH 同窓会との交流を行いました。京都大学・東京大学・帝京大学 SPH 同窓会合同で第 7 回 SPH サロン「大規模研究の「現場」を動かすとは」、第 8 回 SPH サロン「健康・医療情報と向き合う—ヘルスコミュニケーションの最新知見—」、第 9 回 SPH サロン「人を動かす」仕掛け」づくり」



第 7 回サロンでのグループワーク

(2015 年 6 月)

が実施され、京大からも各回 10～15 名程度が参加し、東大、帝京大、慶応大 SPH などの学生、卒業生と交流を深めることができました。

第 75 回日本公衆衛生学会総会(大阪) で自由集会を行います

日本においては 2000 年から公衆衛生大学院の設立が始まり、Master of Public Health (MPH) を授与する大学院は 10 を超えて、さらに新たな大学院、コースが設立されている状況です。まだ歴史は浅いものの、MPH 取得者がどのような場でどう活躍しているかを共有し、それぞれのキャリアパスを考える場を自由集会で持つことを企画しました(現在、学会総会へ申込中)。開催予定日は 10 月 26 日あるいは 27 日の夕方となります。MPH 取得者数名より、これまでの経験と現在のキャリアと MPH の意義について講演を行い、その後、参加者全員でディスカッションを行う予定です。世話人は京大、東大 SPH から出ております。

世話人 原田 浩二
井田 有亮
小林 大介
市川佳世子

新役員からのごあいさつ・近況

○原田浩二

今回は 2002 年の同窓会の設立以来の役員改選となりました。2008 年の SPH 総会から徐々に同窓会活動を再開され、当初、メーリングリストによる情報提供、ニュースレター発行からはじまりました。2012 年から SPH 同窓会合同サロンがはじまり、卒業生が集う

場所ができ、同窓会活動も進んでまいりました。会員の皆さまのご協力あつてのことです。

これから 2 年間の任期において、会員網の充実をさらに進め、またサロン、自由集会を通じた全国の SPH との交流を拡げていきたいと考えております。

○小林大介

皆様、このたび京大 SPH 同窓会副会長としてお認めいただきありがとうございます。11 期生で名古屋大学医学部附属病院メディカル IT センター病院助教の小林大介です。先ほどご説明のありましたとおり、京大 SPH 同窓会は活動が停滞していた時期もあり、同窓生のつながりが少し薄くなっていた時期が長くありました。日本最初の公衆衛生大学院として開設された京大 SPH で学んだ皆様のつながりをこの期に強化し、京大 SPH 同窓会内でのつながり、ファカルティとの連携、そして東大 SPH 同窓会をはじめ、他大学の SPH 同窓会とも今後サロンをはじめ連携・情報交換をしていければと思っております。そのためには同窓生の皆様のご協力やご参加が発展の元だと思っております。ちなみに東大 SPH は 1 年目は研究室に所属せず、全員が 1 つの控え室にロッカーとテーブルがあるところをベースとするため、横のつながりが強いとの印象を受けております。このカリキュラムの良し悪しをここで論ずるつもりもなく、必要もないですが、京大 SPH は入学時に分野を決めることもあり、必修の講義と一緒に受けるものの、同期の間であつても一部を除き横のつながりがあまり強くない印象がありました。せっかく一緒に学んだ仲間ですので、今後も縦横のつながりを深めていければ、きっと皆様の今後のキャリアにおいても財産になることと思います。私自身もキャリアの中

で人とのつながりがとても大事だと思っています。実際に現職に至るまでもそうですし、先日メールさせていただいた NPO 法人の設立・運営もそうでした。今後の京大 SPH 同窓生の皆様のご活躍に少しでもお役に立てるよう、微力ながらご協力できればと思いますので、どうぞよろしくお願いいたします。

○高橋由光

6 期（2005 年入学）の高橋由光です。

この度、会計を担当させていただくことになりました。

京大 SPH 同窓会の運営、発展に少しでも貢献できればと思っています。

ネットワーキングとして、Facebook のグループも作成しました。

是非ご登録ください。

<https://www.facebook.com/groups/1758206774401313/>

○山崎新

1 期（2002 年卒業）の山崎新です。京大 SPH の発展と社会における活躍の場の開拓に努めて参りたいと存じます。

宜しく願い申し上げます。

○植谷可恵

4 期の植谷可恵です。SPH 卒業後、メディカルライターとして臨床研究の実施や発表を支援しており、2014 年からは非常勤講師も務めております。同窓会活動では、お世話になった京大 SPH に少しでも恩返しができればと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

○村上玄樹

6 期（2005 年入学）の村上玄樹です。

現在、福岡県北九州市にあります、産業医科

大学病院医療情報部の講師をしています。

また、病院の医療の質を管理する MQM（Medical Quality Management）室長を拝命し、SPHでの経験と知識を活用しております。

病院実務上で、SPHの講義が点と線がつながる瞬間が感じることができ、いまだに講義資料をめくる日々です。

同窓会を通じて、このような経験や情報を縦横に展開できればと思っています。

今後ともよろしくお願いいたします。

○山口喜志子

男女共同参画室の女性研究者支援相談室で専門相談員をさせて頂いております。

今年で7年目、同じ所に長くいると動きたくなる性分で心ざわめいています。

○中村英輔

微力ながら SPH の発展に尽力をいたす所存でございますので、よろしくお願いします。

○市川佳世子

11 期の市川佳世子です。今年の 3 月で博士後期課程を卒業し、現在 京大健康情報学教室から人事交流として厚生労働省で勤務しております。仕事でも京大 SPH のネットワークで助けられていることも多く、卒業生のネットワークを活かしていける環境作りに貢献出来たらと思っています。よろしくお願いいたします。

○白鳥博之

SPH での仲間は私にとって、今でもかけがえのない宝となっています。この同窓会を通じて、横だけでなく縦とのつながりにも貢献していきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

○佐藤亮

まわりの環境も変わり、追われながら働い

ていますが、何かを追いかけるような、SPH
の生活が懐かしいです。少しでもお手伝いで
できればと思います。

教室近況 Department Activities

医療統計学分野

医療統計学分野では、疫学研究・臨床研究における効率的なデザイン、デザインに基づく統計解析方法やその統計理論についての研究を行っています。昨年度の課題研究テーマは「市販後医薬品の曝露頻度傾向が自己対照研究デザインにおける有害事象発生率比の推定に与える影響」及び「服用時刻の測定誤差を考慮した母集団薬物動態解析－服用時刻が管理された薬物動態試験データの有用性－」でした。より有意義な方法論が提案できるよう、日々研究に励んでいます。

本年度から助教に本医療統計学分野卒業生の米本先生が着任され、新入生も入り、専門職学位課程 4 名、博士後期課程 1 名となりました。日々の講義に加え、毎週火曜日はセミナーを行い、月に一度は、学外の大学、研究機関、製薬企業等の医療統計学の専門家とともに拡大セミナー（Kyoto Biostatistics Seminar: KBS）を実施しています（昨年度末で 136 回目の開催となりました）。発表内容は多岐にわたるため医療統計に関する幅広い知識を得ることができます。

医療統計学分野 HP

(<http://www.kbs.med.kyoto-u.ac.jp/>)

医療疫学分野

医療疫学分野では、設立以来、現在までに 59 名の卒業生を送り出してきました。その中で 18 名が博士を取得し、6 割以上が教職や研究職に就いて全国各地でご活躍されております。さらに、本年度から新たに 2 名の卒業生が教授に就任し、教授 6 名（ナショナルセンター部長等教授相当待遇含む）、准教授 12 名、講師 4 名、助教 14 名となりました。

2016 年度は博士課程 4 名、専門職学位課程 2 名が入学しました。現在、22 名の大学院生が在籍し、大変賑やかに研究、教育を行っています。特別研究学生も 3 名在籍するなど他大学との交流も活発です。

研究面では、大規模データベースを活用した臨床疫学研究、地域を拠点としたコホート研究、診断法評価研究、医療の質を評価する研究などを主体として、2000 年発足以来、現在までに約 350 編（うち IF5 以上の High Impact 論文が約 60 編）の英文原著論文を発信しました。2015 年 4 月には超高齢化社会、自然災害、若手人材育成をテーマにした World Health Summit 京都会合を、また同年ベルリンで本会合を開催し、それぞれ福原が Chair および President を勤めました。



教育面では、臨床研究者養成コース(MCR)が開設 10 周年を迎え、3 月に東京にて MCR10 周年記念シンポジウムを開催し、多数の卒業生・現役院生に集まっていただきました。MCR は 2005 年の開講以来、139 名の卒業生、4 名の教授、そして院生による英文原著論文も約 450 編を数えるまでとなりました。現在は、課題解決型高度人材養成プログラム(中山教授)においても、MCR のエッセンスを全国に提供するためのプログラム MCR Extension に協力しています。なお、MCR Extension では、卒業生の末海・清水が特定助教として研究教育活動に活躍しております。

社会活動では、医療疫学分野が一丸となって福島県での健康長寿事業に取り組んでまいりました、2013 年から福原が福島県立医科大学の副学長を兼任、また臨床研究イノベーションセンター・白河総合診療アカデミーの設立を支援しました。

本年度からは、山崎に代わり准教授に山本が就任し、現在の教員は助教の池之上との 3 名体制となりました。京大病院の特定講師だった福間は病院の特定准教授となり、病院での教育活動に貢献しております。医療疫学においても、他の協力教員や博士院生とともに屋根瓦式の指導体制に協力してくれており、

感謝しております。

今後も医療を変える研究を推進し、健康・医療に関わる様々な課題の解決を行える卒業生を社会に送り出して行きたいと考えております。

薬剤疫学分野

薬剤疫学教室は 2006 年に川上が着任して以降、今年で 10 周年を迎えます。2016 年 11 月 18 日—20 日に京都(みやこめっせ)で開催される日本薬剤疫学会は、教室が主催となり、川上研 10 周年の特別同門会や、冊子の発行も準備しています。本学会には、同門会とあわせて是非ご参集いただき、旧交を温め、また激動の激しい我々の研究・活動領域の最新情報を得る場としていただければと思います。

新年度の人事では、2016 年 1 月より、東京大学小児科医局より新任の竹内正人講師(特定)が着任した以外の変化はありません。現在、田中司朗准教授(生物統計学、疫学)、堀部智久講師(生化学)、河野雅之講師(薬理学)、竹内正人講師(小児科学、臨床疫学)、瀬戸佳穂里助教(歯科口腔外科、疫学)、佐藤泉美助教(疫学、生物統計学)、吉田都美助教(疫学)、井内田科子助教(疫学)という教員の体制で



(写真) 教室納涼会写真(2015 年 7 月)

す。専門職学位課程を修了された桑内亜紀さん(MPH、麻酔科医)は博士課程(PhD)に、箕浦孝晃さん(MCR、糖尿病内科医)は博士後期課程(DrPH)に、また MPH 修了生として研究生だった木下琢也さんも博士後期課程(DrPH)に進学しました。MPH 修了生の Nanthini Thevi Bhoo Pathy さんはマレーシアのマラヤ大学に復学、船越大さんは立命館大学大学院に、マレーシア進学しています。DrPH を今年修了した河村太一さんは千寿製薬に戻り、研究のまとめと学位審査の準備にはいっています。また、DrPH 卒業生の滝沢治さんが、晴れて博士学位を取得されました。

教室は今春から留学生をふくみ、博士後期課程 2 名、MPH 生 6 名、MCR 生 3 名、フランスからの留学生 1 名人と合計 12 名の多士済々の新人を迎えています。そのうち 9 名が臨床医、2 名が薬剤師出身ということもあり、今後の臨床疫学や薬剤疫学の発展が期待されます。

ここ数年、私は、少子社会、超高齢社会の進展とともに、いまやイノベーションや成長を是とする戦略は、社会保障の中では必ずしも時期を得ているとは思えず、また、健康社会を目標とする医学研究を推進するためには、しっかりと地に足をつけて、現実社会の医療や健康のより様々な情報を整備して、疫学研究を推進しなければならないと数年来考えるようになりました。そこで、2014 年からは、(一社)健康・医療・教育情報評価推進機構(HCEI)および学校健診情報センター社(SHR)と連携して、全国の自治体の有する学校健診情報や母子保健情報はじめとした各種の健康情報由来のデータベース構築を開始しました。さらに、全国の介護施設と連携した高齢者健康情報の統合も準備しています。また、2015 年からは、HCEI およびリアルワールドデータ社(RWD)を中心に、全国の医

療機関の電子カルテおよびレセプト情報由来の診療情報を統合したデータベースの構築を開始しました。これらの活動を通じて実感しているのは、各種の法制度に基づいた健診や IT を導入した医療情報管理システムがあっても、現場での医療や健康の向上には十分には役には立っていないということです。そこで、データベースを構築して疫学研究のための二次利用をするということのみならず、たとえば学校健診情報においては、学校現場で個人に健康レポートを還元したり、自治体には健康政策に活用できる分析レポートを還元、医療機関においても、連携する施設には医療の向上や安全対策に有用な分析レポートをお渡しするという、一次利用にも注力するようになりました。このように、学校、自治体や医療の現場でも役立ち、医学研究のためにも役立ち、同時に未来の人類や社会のために役立つという仕組みが活動の継続性にとっては重要と考えています。

上記のように自治体や医療現場の各種の情報をデータベース化したもの同士を、適切に接続してライフコースデータとして解析することで、人生の健康の歴史を紡ぐことができるようになります。疫学研究は、その時点や現場での横断的な健康情報の解析によって数々の知見をもたらしてきましたが、昨今の IT 技術の進歩によって、いままでのような横断研究のみならず、個人や集団の時間軸を越えた縦断研究によって、より多くの知見を人類にもたらすことを期待されているのです。この礎づくりのために、教室の複数のメンバーが尽力してくれており、とても感謝するとともに将来に期待をしているところです。

以上 (川上記)

医療経済学分野

医療経済学分野では、一貫して、医療システムの質・効率・公正を追求しています。研究開発と人材育成の立場から、臨床現場、経営現場、制度政策における縦断的な医療問題解決に挑んでいます。

医療介護保健データベース、レセプトのナショナルデータベース NDB、DPC データベースなどを含む多源的大規模データベースの構築とアナリティクスを進化させてきており、医療現場、経営現場、行政の制度・政策づくりに、役立ててもらっています。当分野を中核とする病院ネットワークも全国から500病院を超える参加となってきています。

医療の質や感染管理などに関わる経済評価、技術評価をも進め、また、エビデンスに基づく診療の普及に取り組むとともに、多くの領域と協働して、エビデンスに基づく医療政策の実現プロセスのフレームワーク形成にも注力しています。日々、国や自治体などとインタラクションをもって、医療介護保健の社会システムに役立つ研究開発を進めてきています。医療の質の地域格差是正、超高齢社会デザイン、地域医療構想や地域包括ケアシステムや関連するまちづくり、WHO、OECD、G7 関連施策へのインプットなど、進めてきています。

卒業生に関しては、現時点(2016.5.4)で公式 Web で公表されている、SPH 約15分野での2015年9月までの博士(社会健康医学)68人(受け入れ定員毎年11人)の内、13人が医療経済学分野から出ており、その後も含め現時点で15名社会健康医学博士を出し、さらに、医学博士9人、計24人の博士を輩出しています。各地で、教授、准教授、講師、助教などとして、大学・大学病院など学術界で活躍する一方、専門職学位取得者を

含め、病院長・副病院長・部長、中央省庁の官僚、国会議員、有力コンサルタントなどとして、大いにご活躍されています。留学も、アメリカ、イギリス、カナダ、オーストラリアに出て行っています。

医療倫理学・遺伝医療学分野



遺伝医療・医療倫理学分野では、昨年度に専門職学位課程 遺伝カウンセラーコース 9 期生の院生 3

名が専門職学位課程を修了しました。平成 28 年度には、博士後期課程に 2 名が進学、専門職学位課程に 4 名が入学し、現在、博士後期課程 7 名、専門職学位課程 8 名が在籍しています。また、文部科学省課題解決型高度医療人材養成プログラム NGSD プロジェクトの次世代スーパードクターの専攻医 2 名を迎えています。

昨年から今年にかけては、例年の教室活動に加えて大きなイベントが 4 つありました。

1 つは、遺伝カウンセラーコース 10 周年記念会の開催です。お世話になった先生方をお招きし、1 期生から 10 期生まで欠席者も含めて総勢 35 名の近況報告を 1 人 1 枚の PPT で行いました。残念ながら参加できなかった皆様も、またの機会に是非お越しくださいませ。

2 つ目は、『遺伝カウンセリングのためのコミュニケーション論』(小杉真司編者、メディカルドゥ)の出版です。この本は、遺伝カウンセリングのためのコミュニケーション概論の講義をベースに、これまで関わってくださった先生方や卒業生などにもご執筆いただき出版しました。ご協力いただいたみなさま本当にありがとうございました。読んでくださった方からのご意見ご感想をお待ちしており

ます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

3 つ目は、一般市民を対象としたパンフレット『家族歴を知ろう!』の作成です。昨年度は 9 期生の平岡さんが課題研究としてパンフレット作成と大学生を対象にパイロット調査を行いました。今年度は一般市民を対象に本調査を実施予定です。パンフレットを使ってみたいな、一緒に調査をやりたいなという方は、是非ご連絡くださいませ。

4 つ目は、2016 年 4 月 3 日から 6 日の日程で、第 40 回遺伝カウンセリング学会が、国際人類遺伝学会 (ICHG2016) と同時開催されましたが、この学術集会では、我が教室の村上裕美さんと三宅秀彦先生が副大会長を担当しました。ICHG との同時開催ということもあり、各国の遺伝カウンセラーの現状報告や遺伝カウンセリングに関する活発な議論がなされ大盛況に終わりました。

その他、今年も国内外での学会発表、臨床遺伝関連のセミナー参加・運営、ヒト遺伝リテラシー向上に向けた活動など継続して行っ

ています。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

健康情報学分野

健康情報学分野は中山健夫教授と高橋由光先生のご指導のもと、現在、博士課程/博士後期課程 19 名、専門職学位課程 10 名、研究員/研究生/研修員の総勢約 60 名が日々研究に勤しんでいます。私たちは健康・医療に関する問題解決を支援する情報やコミュニケーションのあり方について、「つくる・つたえる・つかう」の視点から研究活動の充実を目指しています。学生のバックグラウンドや国籍は多様で、医療系をはじめ、ジャーナリストや公認会計士等の非医療系の方も多く、インドネシアからの留学生も加わり、各々の視点から議論・理解を深めています。

2015 年度は 11 名が学位を授与されました (PhD 1 名、DrPH 1 名、MPH 9 名)。市川佳世子さんは、京都市におけるハイリスク妊婦に対する保健師による家庭訪問の効果につ



2016 年入学式



テキスト出版



パンフレット作成



10 周年記念会

いての研究にて DrPH を、富成伸次郎さんは日本人患者における未破裂脳動脈瘤の3年間の破裂危険性予測モデルの研究にて PhD を取得しました。専門職学位課程では9名が修了し、そのうちの2名、安達絵美さんが妊娠前体格別にみた妊娠中の母体体重増加量と周産期アウトカムとの関連を検討したコホート研究にて、河野文子さんがマレーシア在住の日本人退職者のヘルスケアに関する質的研究にて課題研究優秀賞を受賞しました。2016年度は博士後期課程/博士課程に4名（うち2名が内部進学）と専門職学位課程に7名の新入生を迎えました。

2006年の立ち上げから運営に携わってきた「ながはま0次予防コホート事業」は2010年に第1期（ベースライン調査）を終了し、2015年度は第2期4年目として3655名の市民の皆さまに受診して頂きました。一方、昨夏には中山先生の教授就任10周年を記念して在校生と卒業生で奈良合宿を行い、親交を深めました。年1回開催されるホームカミン

グデーである同門会は、在校生や卒業生の貴重な情報交換の場となっており、今年は7月30日に開催予定です。同窓生の皆さま、同門会はもちろん、お近くにお越しの際にはお気軽にお立ち寄りください。お会いできる日を楽しみにしています。

（文責：博士後期課程1年 安達絵美）

医学コミュニケーション学分野

医学コミュニケーション学分野からのお知らせです。教室が解剖センターからまたまた移動しました。今度はG棟3階になり、ほかのSPHの教室ととても近くなりました。

今年4月、修士課程の中摩さん、舟木さん、そして博士後期課程の汪さんという3人の新入生が入学して一気に教室が大きくなりました。汪さんは教室初めての留学生です。

それから舟木さんが5月の連休中に無事に女の子を出産しました！（お母さんと学生の2足のわらじを履いての生活が充実します



2015年7月 同門会にて

ように。)M4の瀬尾さんは今年は学生生活の最終年度になります。万全の態勢で準備をしているようです。研究生の宮本さんは論文をこれまで3本書いてまだまだいけそうです。

3年間の科研費による成果をまとめた“*When I am in Japan, I feel as though I'm not disabled*” : A cross-cultural adjustment study of trainees with disabilities from Asia-Pacific regions を *Disability Studies Quarterly* から出版予定です。高齢者とのコミュニケーション研究はデータが集まりまとめている最中で、瞑想研究は3本投稿中です。また10月に兵庫県で行われる医学教育セミナーでワークショップを担当することになり、8月には初めて欧州医学教育学会に、11月には久しぶりに米国コミュニケーション学会に参加予定です。最後に今年度から建築学、ジェロントロジー、障害学生支援コーディネーターの先生方と知恵を持ち寄って、大学コンソーシアム京都からの2016年度指定調査課題「大学での障害者差別解消へ向けたアクセシビリティと合理的配慮のDBの構築障害学生支援室連携組織の設立へ向けて」が始まりました。異分野との

協働は大変ですが一人では出せない成果も出せると信じて研究していこうと考えています。



写真：今年の新入生たちと

知的財産経営学分野

知的財産経営学分野は、教員メンバーは変更なく2016年度を迎えました。学生の方は2016年3月に11期生の井上 隆さん、小野 英美子さんが、それぞれ、バイオベンチャーの特許出願、医療機器分野の特許出願についての課題研究を修め無事卒業されました。現



在、アカデミア、企業でご活躍中です。また、新入生として山洞 絵理さんが入学され、頑張っております。

研究分野では、バイオベンチャーの発明創出力と経営状況との関連性を示した論文が2016年2月に *Drug Discovery Today* 誌に掲載されました。今後は、これまでの課題研究の研究成果である各グループの特許出願の特徴について、まとめていく予定となっております。修士2年生となった鍾さんは、現在、バイオシミラーについての研究を始めており、今後の成果が楽しみです。

毎年恒例の日本知財学会時の同窓会（東京）、忘年会（京都）は今年も開催の予定となっております。お忙しいとは思いますが、たくさんの参加お待ちしております。また、研究室訪問はいつでも歓迎しますので、メディカルイノベーションセンター棟の新しい研究室にまだお越しになっていない卒業生は、ぜひ一度研究室にもお越しください。教員一同、お待ちしております。

環境衛生学分野

環境衛生学分野は、小泉昭夫教授をはじめ

教員3名と研究員、研究補佐員2名、大学院生13名の総勢18名で構成され、「Plain Living, High Thinking (W. Wordsworth)」という指導方針のもと日々研究に励んでおります。この4月には奥田裕子研究員が福岡大学医学部に助教として栄転しました。国際交流として、中国政府派遣研究員制度により四川大学の鄭波 招聘外国人学者が参加し、またストックホルム大学からの短期交流学生も参加しています。

当研究室では環境研究と遺伝疫学研究を展開しており、相互に関連しながら進めております。主に以下のような研究を行っています。

1. 福島県の放射性物質汚染の課題
2. 難分解性汚染化学物質の環境問題、越境汚染問題
3. 小児の脳血管疾患として東アジアに頻度が高いもやもや病
4. 小児四肢疼痛発作症

もやもや病の遺伝子探索では、感受性遺伝子 *Mysterin (RNF213)* を発見し、血管形成能力への影響を遺伝子改変マウスによる解析を行っています。これらの研究成果により、小林講師が日本衛生学会第29回奨励賞を受賞し、ますますの発展を目指しております。小



2016年4月 新教室員歓迎会（京都大学楽友会館）

児四肢疼痛発作症について、原因遺伝子 SCN11A (Nav1.9) を発見し、神経伝達への影響を遺伝子改変マウスによる解析、電気生理学から明らかにしました ([PLOS ONE 2016; 11: e0154827](#))。さらに遺伝解析とその環境応答の両面からアプローチしています。環境研究では福島第一原子力発電所事故後、2013 年 8 月の原発のがれき撤去作業により近隣地域に再汚染が生じたことを明らかにしました ([Environ Sci Technol 2015;49:14028](#))。また放射線被ばく調査を継続し、林業従事者の被ばくについて調査しています。

教室行事も夏の納涼、レクリエーションなどお互いの親睦を深めています（去年は天橋立）。

卒業生の皆様も、近くまで来られた際には、ぜひお立ち寄りください。

健康増進・行動学分野

今年は大学院生は PhD コースの 3 名が卒業し、古川壽亮教授が 2010 年に赴任して以来、PhD コース 3 名、DrPH コース 1 名、MPH コース 3 名、MCR コース 2 名が学位取得となりました。卒業された皆さんは、大学や病院、行政、AMED といった場で活躍されています。現在、古川教授のもと、2 月に着任した渡辺准教授、助教 1 名、研究員 1 名、医学専攻博士課程 2 名、社会健康医学系専攻博士後期課程 3 名、専門職学位課程 2 名、MCR コース 3 名が在籍し、臨床疫学と認知行動療法を 2 本柱に研究を行っています。最近になり、大学院生がリード/関与した研究が多く出版されるようになってきました。現在は、

1. 系統的レビュー（通常のメタアナリシスに加え、ネットワークメタアナリシス、個人データメタアナリシスなど、さらに

エビデンスレベルの高い方法論を用いるようになっています）

2. 抗うつ剤の適切な使用戦略を確立するための実践的メガトライアル（2000 名の患者さんのエントリーが完了し、論文執筆の準備を行っています。）
3. 治療抵抗性うつ病に対するスマートフォン認知行動療法（アプリの開発を終え、現在、無作為割り付け比較試験を実施しています。）

4. 臨床疫学研究、メタ疫学研究

といった研究を行っています。教室の研究や大学院生が考えたテーマの研究を、和気藹々と皆でディスカッションしながら進めています。皆様、是非お気軽にお立ち寄りください。

予防医療学分野

予防医療学教室の教員は、学校医として健康診断や初期診療を、また産業医として職場巡視や面接指導を行いながら、臨床実務に直結する研究を行っています。平成 28 年度 4 月時点で教員が 7 名、常駐する大学院生が特別研究学生を含めて 6 名、そして他機関の所属で当教室と緊密な連携をとっている研究者が数名、秘書・研究補助者 3 名で教員室や院生室はいつも賑やかです。

2015 年に刊行された英文原著論文は *Circulation*、*Resuscitation*、*Lancet Infectious Diseases* など 20 編です。2016 年に入って、石見教授が深く関わった日本蘇生協議会編『JRC 蘇生ガイドライン 2015』と川村教授の手なる『臨床研究の教科書：研究デザインとデータ処理のポイント』が医学書院から相次いで出版されました。

学内各層が協力して入学式前の 3 日間に学部新入生 3000 人に対して一斉に行った心肺蘇生の講習会は壮観であり、学会その他の場

で報告がなされて大きな反響を呼んでいます。

生涯にわたる健康データの活用プロジェクトが計画されており、医学以外の社会領域や仏ボルドー大学との連携も始まり、予防医療学教室は新しい歴史を歩み始めています。

環境生態学分野

平成 28 年 4 月以後の研究室のスタッフ等（東南アジア研所属）は、教授・西渕光昭、連携准教授・中口義次、特定助教・Kayali Ahamad Yaman [シリア出身]、連携助教・白川康一、研究支援推進員・瀬尾ウライワン[タイ出身]、技術補佐員・中村若菜、研修員・植山徹です。SPH 出身の教務補佐員・中本勲は 3 月末で 3 年間の任期を完了しました。

平成 28 年 3 月に大学院医学研究科（医学専攻）およびグローバル大学院 GSS を修了した Escalante Maldonado Oscar Roberto 博士は、母国に帰国して 4 月からペルーNIH で研究を継続、アジア・アフリカ地域研究研究科の修士課程院生・甲斐丞貴および博士課程

院生・佐藤恵子はそれぞれ、インドネシアとスリランカでの研究に従事しています。

平成 28 年 4 月～6 月期に国外から西渕研を訪問予定の研究者は、(インドネシア) アンダラス大学医学部准教授・Abdul Aziz Jamal [4 月末から 1 週間]、(サウジアラビア) ダンマーム大学応用医学部准教授 Mohamed Nasreldin Elhadi Hussein [京都大学招聘外国人学者、5 月末から 1 週間]、(タイ) プリンス・オブ・ソンクラ大学理学研究科博士課程院生 Miss Jetnaphang Kongreung と Miss Sutima Preeprem [京都大学外国人共同研究者、6 月末から 10 ヶ月] です。

西渕教授の定年退職までの在職期間は、あと 3 年弱となりました。これまで東南アジア研究で得た成果を世界の他地域（中東・南米）の人々の生活の役に立つような研究の展開を目指して、研究室メンバーと国外共同研究者が協力しています。

人間生態学分野



平成 28 年 3 月の中本氏（手前の列の左端）と Oscar Roberto 博士（手前の列の右端）の送別会

松林公蔵教授が平成 28 年 3 月 31 日をもって京都大学を退職されました。

松林教授の主な学術的功績は、高齢者医療は必ずしも病院医療のみでは完結しないというお考えのもとに、平成 2 年から高知県香北町との協働で、同町に在住する高齢者を対象とした総合的機能評価を用いる「フィールド医学」を創出されたことにあります。香北町およびその後行われた高知県土佐町において日常生活機能の向上に寄与し、女性の平均寿命の伸びを県下第 1 位に導かれました。京都大学東南アジア研究所に着任されてからは、シンガポール、韓国、ベトナム、ラオス、インドネシア、ミャンマー、タイ、ブータンなどの諸地域においても活動を展開されました。教育活動にも格別の情熱を傾け、多数の院生ならびに若手研究者とフィールドをともにし、人材育成に尽力されました。ヒマラヤ登山にもあくなき情熱をお持ちで、カンペンチン峰 (7281m)、ナムナニ峰 (7694m)、マサコン峰 (7200m) という 3 つの未踏峰の初登頂者でもあります。平成 2 年には、京都大学ヒ

マラヤ医学学術登山隊・学術隊長として、シシャパンマ峰 (8027m) にも登頂を果たし、日本スポーツ賞、秩父宮記念学術賞を授与され、松林教授の功績は既成の学問の枠内におさまりません。

後任として坂本龍太が准教授として講座の教育、研究にあたります。人間生態学講座では、松林教授のパイオニアスピリッツを継承し、生活の場に根ざした医療のあり方を模索しながら、人々の健康と世界の平和に少しでも貢献していきたいと思っております。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

附属病院臨床研究総合センター EBM 推進部

昨年のオープンキャンパスから参加させて頂いている臨床研究総合センター EBM 推進部です。ご存じのように、治療薬の有効性や安全性は製造販売承認後のよくデザインされた臨床試験によって検証されるものであり、決して試験管内だけで生まれるものではありません。



松林先生退職記念写真

ません。また、興味深い優れたクリニカル・クエスションは企業にではなく、ベッドサイドにあると考えています。これまで、SPHで「EBM 研究概論」の講義を担当するなど、臨床研究に関する教育にも携わってきましたが、今春より1名の大学院生を受け入れる機会を得て、本レターにも寄稿させて頂くことになりました。

EBM 推進部は、上嶋をはじめ教員3名、研究員2名、研究補佐員10名など、全18名のスタッフからなり、疫学研究を含む10以上の臨床研究をコントロールしています。また、当部で実施する臨床研究は「医療政策や診療ガイドラインに影響を与えるインパクト」があることを目指して、1) 質の高い研究者主導の大規模臨床試験、2) 市販後薬の適応拡大を視野に入れた臨床試験、3) アカデミアに特徴的な問題解決のための疫学研究、を実施しています。同時に、臨床研究の資金の調達やプロトコルの立案からデータマネジメント、さらに結果の解釈から論文執筆まで、臨床研究のほぼ全経過にコミットしており、この環境をOJTの場として提供しています。また、「EBM 研究概論」でも単なる座学だけではなく、当部で実際に運営した臨床試験を題材にした講義を実施しています。臨床研究に関して持たれた素朴な疑問(?)を含めて、何かあれば気軽に訪室して頂ければと思っております。宜しくお願いします。

学生近況

学生連絡委員会 活動報告

第 16 期学生連絡委員会

副委員長 佐藤優希・米井歩

私達第 16 期学生連絡委員は、2016 年 1 月に引継ぎを受け、先輩方からのご指導や、歴代の会議録や資料を元に活動を開始いたしました。

学生連絡委員の主な仕事は 2 月の課題研究発表会の運営サポート、4 月の新入生歓迎会と 3 月の謝恩会の企画・運営、メーリングリストの管理・運用となっており、学生生活の充実を目指して活動しております。

課題研究発表会では、発表者が発表に集中できるとともに、タイトなスケジュールの中で円滑に発表が進むよう機器管理等を行いました。先輩方の素晴らしい発表が無事終了したことにほっとしました。

今年の新入生交流会では、新入生が積極参加できる内容にすることで、同級生同士、先生方との親睦を深められることを目指しました。78 名にご参加いただき、福原先生の心を打つスピーチに始まり、歓談、総長カレーをかけたクイズなど盛会となりました。

今後の委員会の仕事としては、各イベントマニュアルの見直し、メーリングリストの在り方の見直し、そして次年度への確実な引継ぎを行い、さらなる京大 SPH の発展に貢献したいと考えております。

今後皆さまのお力を借りることもあるかと思いますが、何卒よろしくお願いいたします。



中山先生、原田先生と新入生の方々



新入生歓迎会 集合写真



質疑応答

卒業生近況 Alumni Activities

第7期 専門職学位課程
遺伝カウンセラー・コーディネータユニット
村上裕美

私は2006年（平成18年）に遺伝カウンセラー・コーディネータユニットの1期生としてSPHに入学しました。

それまで、京大病院に看護職で長年勤務していたのですが、この養成課程ができることを院内掲示のポスターで知り、小杉教授に連絡を取ったのが、全てのはじまりでした。当時、京大病院で遺伝子に関連した治療や臨床研究が行われていたことや、患者さんから遺伝に関する問合せや相談を受けたりする機会があったりして、この領域に対する興味と勉強の必要性を（漠然とではありましたが）感じていた時期だったので、まさにぴったりのタイミングでめぐり会った、という思いがしたのをおぼえています。

受験勉強の末、合格できた時の喜びは、みなさんもそれぞれにご経験のことだと思いますが、入学後、講義や試験を受けるのがウン十年ぶりの中年院生にとっては、SPHでの勉強は想像以上に大変で、特に1回生の前期は、講義についていけないことも度々でした。それでもなんとか卒業できたのは、わからないところを教えてもらったり、試験勉強のコツを伝授してもらったりと、協力し、励まし合った同期の存在があつてこそと心から感謝しています。1期生で、全てが初めてという状況は、いろいろ大変なこともあったのですが、それよりも当時は、このコースが自分たちから始まるんだという気概に溢れていたように思います。また、遺伝カウンセラー・コーディネータユニットという名称の通り、臨床研

究コーディネーターコースの人たちとは、一緒に講義を受けるだけでなく、ゼミやさまざまな行事・活動を共にした仲間で、お互いの研究について、熱くディスカッションしたこともよい経験でした。遺伝学は継承と多様性の学問と言われますが、SPHの各分野の多様なバックグラウンドを持つ方々との出会いは、それまで病院での仕事しか知らなかった私に、社会健康医学の視野を拓ける機会になったと思います。そして何より、各分野の教員の方々に恵まれたことに感謝していますし、課程を修了した今でもお世話になっています。

入学した頃は、認定遺伝カウンセラーが全国でまだ数名しかいなくて、実物に出会ったことがなかった（！？）ため、自らも目指して勉強している院生にとっては学会やセミナーなどで遺伝カウンセラーとお話すること自体が貴重な機会だったような状況でした。それが現在では182名に増え、京大遺伝カウンセラーコースの卒業生たちも、各地の医療機関や企業で活躍しています。

私は、修士課程の後、医療倫理学分野の博士後期課程に進学し、平成24年に研究指導認定退学した後、京大病院の遺伝子診療部で遺伝カウンセラーとして勤務することになりました。もちろん中心となる仕事は遺伝カウンセリングですが、遺伝学的検査や遺伝カウンセリングに対する認知度の高まりとともに、院内外からの医療者の問合せや相談が年々増え、その対応や診療科との連携も重要な遺伝カウンセラーの役割の一つとなっています。また、臨床研究における支援も遺伝子診療部が対応し、院内勉強会の開催など、クライアントのみならず、医療者への教育・啓発も行っています。また今年度から、京大病院の倫

理支援部の仕事もお手伝いすることになり、
このように、さまざまな場面で SPH で学んだ知識が役に立ったり、さらに勉強しながら実務に活かしたりできることに、専門職学位課程で学べたことの意義を感じています。

また、当遺伝子診療部は遺伝カウンセラーコースの実習施設でもありますので、現遺伝カウンセラーコース院生の指導をしたり、大学院でも、遺伝カウンセラーコースの科目である、遺伝カウンセラーのためのコミュニケーション概論の講義や合同カンファレンス、課題研究など、現役院生の少し先を歩んできた身近な先輩として、関わらせていただいています。

他にも、2011 年に発足した日本認定遺伝カウンセラー協会の仕事や、日本遺伝カウンセリング学会の委員会活動、セミナー支援、講演、患者会や相談会のお手伝いなど、院外活動も周囲の理解を得ながら行っています。おかげさまでこのような充実した日々を送っていても、実際には、難しい課題に直面したり、へこたれてしまうことも時々あります。でもそんな時は、入学式の写真を眺めて、これから勉強できることの嬉しさや遺伝カウンセラーになりたいという希望に満ちていた当時の自分の笑顔に励まされています。そういった意味でも、SPH で過ごした数年間は、特別な時間であり、これからも私の拠りどころであり続けるのです。

編集後記

ニュースレター第7号の発行にあたり、記事の執筆をいただいた各分野、卒業生のみなさま大変ありがとうございました。記事、ニュース、写真、宣伝など、みなさまのご協力よろしくお願いいたします。

同窓会登録がまだお済みでない方へ

同窓会での活動の案内を行う上で、連絡先を把握したいと考えております。

同窓会に登録いただける方は、

[Google フォーム](#)から登録、

また下記の項目について記入し、

事務局(kusphalumni-office@umin.ac.jp)まで返信お願いいたします。

回答項目 (氏名、入学年次、卒業年次、卒業時所属分野、

電子メールアドレス (継続性のあるもの)、住所 (任意)、勤務先 (任意))

異動がある方へ

連絡先の変更などがありましたら、上記フォームまたはアドレスまでお知らせください。

Want to be listed in the Alumni Association?

Please fill out the [Google form](#),

Or email me at kusphalumni-office@umin.ac.jp! Include your name, your graduation date, and any personal and/or professional information you would like us to contact. We will deliver newsletters and events information.

We'd love to hear from you!

京都大学 SPH 同窓会ニュースレター 第7号



発行 京都大学医学研究科 社会健康医学系専攻同窓会

発行日 2016年6月27日

〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町 京都大学医学研究科環境衛生学分野内

T E L 075-753-4490 F A X 075-753-4458

E-mail kusphalumni-office@umin.ac.jp